

## 詩の形成について

—Herbert Read から—

荒木文雄

ハーバート・リードの芸術論は多方面にわたり、詩の形成についての所説、またそれに関する断片も随所にみられるのであるが、ここでは主として一九三二年に彼が書き、一九三八年に自編の *Collected Essays in Literary Criticism* におさめられた *Form in Modern Poetry* 中の *The Personality of the Poet* 及び、一九五二年それ以前十五年間にいろいろな機会に発表した論文を集めて、*The Philosophy of Modern Art* として出版したときにおさめられた一九三六年の作 *Surrealism and the Romantic Principle* の二篇を研究の対象とした。

研究というよりむしろ紹介という形になるのであるが、筆者の意図するところは、リードのような考え方に對して現代日本の詩人がいかに考えるかを知りたいの

である。筆者にはリードの考え方は一々もつともだと思われるのであるが、日本の現在の詩には明らかにこのような考え方に相反する立場から書かれたと思われる詩が多くあり、それはあるいは日本の詩の方向を誤まらせるのではないかと思うにつけ、ここにリードが論証しているような考え方に反対する考え方があつたらば、それを明らかにして問題点を探りたいと願うのである。尚後日日本の既成の詩を、リードの立場から吟味してみたい希望をもっている。

リードは前者の論文の中でまず個性 *personality* という語の意味するところを明らかにしようとする。「——真実の人間なら自分の作品に何か自分のプリントを残すだろうし、文学作品の場合なら実際そうでなければなら

ない筈だ。文学とはそれほど個人的なものなのである。「  
 というような常識的な「個性」の用い方に対して、エリ  
 オット T. S. Eliot のよく知られている言葉を引用す  
 る。

「詩は情緒の解放ではない。情緒からの逃避である。  
 個性の表現ではなく、個性からの逃避である」(増野正衛  
 氏訳)

(Poetry is not a turning loose of emotion but an  
 escape from emotion; it is not the expression of  
 personality, but an escape from personality.)

エリオットの意味するところは、——詩人は表現すべ  
 き個性をもつのではなくて、特殊な媒体をもつのであ  
 る。それは単に媒体であって個性ではなく、その媒体の  
 中で印象と経験が特殊な思いがけぬしかたで結合するの  
 である。その人間にとって重要な印象、経験は詩の中に  
 あらわれぬかも知れないし、詩の中で重要となる印象、  
 経験は、その人間、個性には、全くどうでもよい役割を  
 演じることになるかもしれない。

(——the poet has, not a 'personality' to express,  
 but a particular medium, which is only a medium  
 and not a personality, in which impressions and

experiences combine in peculiar and unexpected  
 ways. Impressions and experiences which are  
 important for the man may take no place in the  
 poetry, and those which become important in the  
 poetry may play quite a negligible part in the  
 man, the personality.)

リードはエリオットに対して、エリオットは「個性」  
 という概念は不可避免的にあいまいなものだと考えている  
 ようだ、少くともそれを明らかにしようとしないう、とい  
 う。

彼は「個性」に定義を与えようとつとめ、コールリ  
 ジ Coleridge キーツ Keats など彼の先輩たちの説を一  
 層進めて心理学という科学の領域にふみこむのである。  
 そして「個性」と「性格」character の間に区別をたて  
 る。なるべく彼の言葉に従ってのべるならば、この二者  
 はしばしば混同されてさえているので明確に区別しておか  
 ねばならない。性格とは彫りこまれたサイン、区別の為  
 のマークを意味するギリシヤ語からきたもので、一般に  
 は一つの型に作りあげられた人間、堅固な、一貫した頼  
 もしい人間を意味する。彼は精神分析方面の仮説を、す  
 なわち性格の基礎として抑圧を考える考え方を最も示唆

にとむものとし、ロウバック Dr. Roback をあげる。

「性格とはある統制的な原理にしたがって本能的衝動を抑制しようとする持続した心理的生理的性向の結果である。」リードは「抑制する性向」disposition to inhibit といふところを普通の倫理的な意味で「抑制する意志」としておいてもよいだろうといい、ロウバックがゲーテから引用している対句をあげるが、その中でゲーテがタレントとよんでいるものを彼は個性としているのである。

「才能は孤独のなかでつくられ、性格は世の流れのなかでつくられる」(増野正衛氏訳)

(Es bildet ein Talent sich in der Stille: Sich ein Character in dem Strom der Welt.)

性格は知能に関係があり、知能の全然ない精神異常者は性格を欠く人間である。また性格は一たん形づくられると体験によって影響されない。性格は経験に対する鑑である。性格は俗にいうセットされ固くゆで上げられたものである。

情緒 emotions でさえも性格を溶かしたり動かししたりすることはない。情緒は性格の基部に打ち寄せては空しく崩れる波である。友情や愛情の情緒的な要請にもかか

わらず、その断固さ、正義を実行した「性格の人」の例は歴史に多くみられる。

一方「個性」について述べるに当りリードはフロイド Freud の学説から入ってゆく。——精神分析は精神生活を意識的なものと無意識的なものとに分けるといふ前提を基本としている。この区分だけが病理学的な精神過程を理解させ、科学的に整合させるのである。いいかえると意識が精神生活のエッセンスであるという見解を受け入れることはできない、——意識は精神生活の一属性であり、精神生活の他のもろもろの属性と共存する場合もあれば、不在である場合もある。

それ自身は意識されずに、普通の観念 ideas が引きおこすあらゆる結果を心中に引きおこすことのできる非常に強力な精神過程、ないし観念が存在することが発見され、というより仮定せざるをえなくなった。そのような観念はある力がそれに対立しているために意識されえないのであって、さもないれば意識されるであろうし、その時にはそれらの観念は精神的なものとして通用している他の要素と相違はないだろう。対立する力を取り除き、問題の観念を意識化する手段が精神分析のテクニクの中に見えられたという事実が、この学説を論駁しが

たいものにしてゐる。

観念が意識化される前に存在した状態 *state* は抑圧 *repression* とよばれ、抑圧をひきおこしそれを維持する力は抵抗 *resistance* である。だが、無意識には二種類ある。潜在的であるが、意識化され得るものと、抑圧されて普通には意識化され得ないものである。潜在的でダイナミックな意味でなく記述的 *descriptive* な意味でだけ無意識であるものが前意識 *preconscious* で、無意識という用語はダイナミックな無意識抑圧について用いられる。

フロイドは各個人には精神過程の一貫した統制機構があるとし、それをその人間のエゴ *ego* とよぶ。リードは「個性」のまずもつての定義にこの「エゴ」を用いるのだ。

エゴはわれわれの思想の意識的な流動、われわれが受ける印象、われわれが経験する感動と一致するものであり、また精神過程の一貫した機構であるこのエゴから抑圧が生じ、それによって、ある心的傾向を、意識からのみならず、他の形での表示や活動から切り捨てようとするところみがなされる。

エゴは終生本質的に受動的にふるまうものであって、

われわれはいわば未知の統御できぬ力によって生かされているのだ。これらの力はおそらく各個人生得のものであり差別あるものであろう。というのは、常時はわれわれが抑制しているが、われわれの意識的な理性では完全に統制できないあの本能や情熱の貯えなのだから。この貯えをフロイドは *id* と名づけるが、それはエゴの非個人的 *impersonal* な面である。

「性格」と「個性」との区別について尚リードの説明のいくらかをあげるならば、性格とは個性の中に存在する管のある衝動が抑圧される為に生じる個人の性向である。ゆえにそれは個性よりも制限されたものであり、ひどく積極的な面があるようだが、実際は意識の流れにある固定と否定がおかれる結果生じるものなのだ。あふれる水は兩岸の間にとじこめられる時「性格」と方向とを獲得するのである。

約言すると「性格」とは個人がえらぶ非個人的な一つの理想であり、その理想のために他のすべての要求、特にセンチメントやエモーションの要求を犠牲にするのである。したがってそれは「個性」と対立しておかれるべきものである。あらゆる抒情的衝動をふくめて詩はみな「個性」の産物であり、「性格」の中では抑制される。

インスピレーションは個性が硬化して性格とならない間だけ流動するといえる。心理には代償 compensation という現象があり、ある本能を抑制すると別の本能が活気づく。人間は限りなく複雑な機械であって、一つの行為の阻止はもう一つの行為を解放する傾向があるのだ。性格の人がある本能の意識的な作用を抑圧しても、その本能が、前意識、無意識の状態へと地下道を進むことをふせぐことはできぬ。本能の肉体的な潜勢力は、たとえ本能の表面的な働きが抑圧されようと、身体の中にとどまるのだ。意識に抑圧されたものは想像の中に反動するが、それはフロイドの前意識なのだ。ユング Dr. Jung はこの仮定を確証する。

「知識人の無意識的な感情 the unconscious feelings of the intellectual は奇妙にファンタスティックであり、意識の仰々しい合理主義的な主知主義とグロテスクな対照をすることが多い。意識的な思考の有目的な統御された性質に対し、この感情は衝動的非統御的で、氣むずかしく、不合理、原始的、古代風で、未開人の感情に似ている。」

このような線にそって、リードは今日のある知的なタイプの芸術を説明することができてうだとい、その列

に、フランスのシュルレアリストたち、カフカ F. Kafka ジョイス James Joyce クレー Paul Klee エルスト Max Ernst をあげて。

「個性」の心理過程の一貫した機構を、「性格」の固定した組織と混同してはならないのは、芸術作品の一貫性を機械の簡明さと混同してはならないのと同様である。

判断が外側から外部的な作用によって感覚 sensations に課せられるなら、それは性格を結果する抑圧の過程である。判断はわれわれの感覚の歴史の中から浮び、感覚によってえらばれ、個性の一貫性とは、自然の過程の一貫性であって専横な訓育の一貫性ではない。

「性格とは人間の定義 definition への悲劇的な一致だ」とフェルナンデス Fernandez はいったが、フロイドなら definition の代りに ego-ideal というであろう。「個性はそのような definition も ideal も知らないのだ。それは思考のアクチブな過程であり、種々の feelings や sentiments の間に保たれる関係のバランスなのである。」

リードはインスピレーションの問題にふれラブック Percy Lubbock を引用する。

「——真夜中の沈黙と孤独の時刻に彼は一度だけ自分の心の一番奥の部屋を開いて自分の *genius* と面と向って立ったように思われる」

創作活動のそのような雰囲気の中にあつて、作家はその個性に面して立つのだ。自分の意識する心の波動する限界、知覚の光が忘却の闇と出あう伸縮し動揺する一つの地平線を充分意識して立つのだ。そしてその光の領域を知覚しつづけ、同時により多くの光のほめかしを求めて、地平線を見つめながら、意識へのあの新しい光を誘い入れるのである。あたかも薄明、かりそめには一つの星もみえないが、じつとみているにつれて輝き出すようなものだ。そんな光は勿論、フロイドが、前意識的な心の状態、とよぶところのものの中の、言語形象 *verbal images* の潜在的な記憶からくるのである。あるいは、抑圧された感覚の神経の痕跡ばかりでなく、本能を方向づけるあの伝承のパターン *inherited patterns* がかくされている尚一層はくせんとした無意識の状態からくるのである。

しかし詩人が出来上るのはインスピレーションによるだけではない。光が突然さしこむためではない。それは間歌 *intermission* にすぎずそれだけを離してみればすぐ絶

望へとつづく。肝心な機能は自分の個性を知覚すること、モンテーニュが正確に描いているように、分裂や内訌なくその本来の活動をやしなう能力なのである。

リードが前に引用したエリオットの「詩人は表現すべき個性をもつのではなく、特殊な媒体をもつのだ。それは単に媒体であつて、……その中で印象や体験が特殊な思いがけないやり方で結合するのである」という言葉に戻つて、次のように云っているのは興味深い。

「ある種類の芸術家を他の種類の芸術家と区別するものは、彼らの心状 *states of mind* 彼らの心のからくり *mental machinery* ではなく感覚発展の分布の相違 *difference in the distribution of sensational development* である。詩人と画家との相違は言語・聴覚・感受性 *verbal-aural sensibility* と造型・視覚・感受性 *plastic-visual sensibility* との相違であり、材料の相違であつてメソッドの相違ではない。これはエリオット氏を他のいい方であつているのである」

以上のような考え方が「シュルレアリスムとローマン主義の原理」へとつづいている。彼の多方面な芸術活動は無論相互的であるが、その基礎は彼のローマン主義的な詩人としての資質にあるようだ。

彼によるとシュルレアリスムはその誕生の瞬間から實際的な現象であった。国際連盟のような人工的な集合体ではなく、自然に発生した国際的兄弟的な組織である。シュルレアリスムの主張が基本とする証拠は数世紀にわたって散在する。永久的な人間の特性の、無連絡な局部的な啓示といえるが、これらの証拠がイギリスにおけるほど豊富なところはほかにない。

リードのこの論文の主な目的はそのようなイギリスにおける証拠を提出してシュルレアリスムの一般的理論にむすびつけ、就中ブレトン André Breton が宣言した真実を、より広汎な基礎に立って再確認しようというのである。

Suprerrealism in general is the romantic principle  
in art.

とリードは断ずるのであるが、suprerrealism は surrealism というフランス語に対して彼が適当だと考えたものである。そしてローマン主義に對立する古典主義 classicism について、グリアスン Sir Herbert Grierson を引用する。グリアスンのいうところは「古典主義文学とは、道德的政治的に明瞭な進歩を自覺的に成就した国民、ジェネレーションの産物であり、その人生觀は、そ

れがぬけ出てきた人生觀よりもより自然で人間的で一般的だという確信をもつ。それは全体性の感覺、多様なものの統一の感覺をもって人生を回顧させる綜合性である。芸術家の仕事はそのような意識に表現を与えることであつて、ここからその堅固、明確、すぐれた芸術家の場合には美が出てくるのだ。古典主義芸術家の仕事は、彼が読者とち合っている共通のセンチメントや思想の一团に、個々の表現、形式美を与えることである。」

グリアスンは、これに加えて、ローマン主義は人間の綜合の行きづまりを破って出てくるもので、古典的とローマン的とは歴史における人間の心臓の膨脹收縮作用であるというのであるが、リードはこの二つは外皮と種子との關係にあるので、弁証法的な對立の位置を占めるものとするのは誤りであるとする。——ある社会が力の均衡、自然的な秩序を保った平衡状態、綜合体とみなされている場合でも、実際にはある特殊階級の優越を、その階級的な經濟、文化的優越を表示しているに過ぎないのだ。そのような社会の安全のためには、思想、表現樣式の統一が基本的に必要になってくる。ここから古典芸術の、標準への不断的復歸が説明できる。これら標準とは、秩序、比率、均斉、均衡、調和、あらゆる靜的、

非有機的な性質の典型的パターンなのだ。成長、それゆえ変化が依存する生命的な本能を統制し抑圧する知的な概念であり、自由に決定された選択ではなく、押しつけられた理想なのだ。

生命の、創造の、解放の原理があり、それがローマン的精神なのであり、秩序、統制、抑圧の原理があり、それが古典的精神なのである。後者にはある目的がある。本能が、ある理想、価値観のためにくつわをはめられる、——しかししらべてみると、それは常に特定の社会のしくみ、特定の階級のルール of の永続を防衛することになるのである。

ローマン主義を芸術家と、古典主義を社会と結びつけて考えると真実に近い。古典主義とは、芸術家を順応させようと期待する政治的な芸術概念なのだから。

リードは、そうするとローマン的な芸術家は社会と衝突する個人主義者でしかないというような、おこりそうな非難に対して答える。社会的順応の失敗から芸術家の精神的個性が決定されるという点ではこれは真実であるが、芸術家は各人の中にひとしく埋れている自我の秘密 secret of the self を社会に提供するものであり、この自我 self はわれわれが想像しているような個人の所有

物ではなく、大部分無意識からの要素で出来上っているものなのだ。そして無意識について知れば知るほど、それは集団的なもの、——グリアスンが古典的芸術家の専門的な関心事だとしている共通のセンチメントや思想、一般的な真実の一团であるらしい。そして古典主義の普遍的真実は単に一エポックの一时的偏見であるかも知れないが、ローマン主義の普遍的真実は、人間の進化する意識と時代を同じくするのである。

リードはまた内向型 'introvert'、外向型 'extravert' という二種の個性に言及するのであるが、外向型の芸術家というようなタイプがあることは疑問だとする。何故なら外向的になる度合に応じて芸術家は本質的な意味において芸術家ではなくなるのだから。制作過程には、芸術家が扱う材料に対して客観的態度を伴うことは多分であり厳密にいつて主観的なのは自動的なテキストか作図だけである。シュルレアリストはそのような自動的な表現 automatic expression の意義を主張し、それを実践の基礎にしているけれど、すべての芸術が必ずそんな条件で生み出されると主張しているのではないのだ。但し意識的な才能 talent の行使によっては芸術作品を生み出す可能性は絶対でないのだ、とは主張するのである。一連

の法則をまもることによって芸術作品が創られるという考えは、人間が試験管の中で出来上るといふ考えにひとしい。

——一人の詩人の全作品の中から生き残る一行を、そしてまさにその不合理性のゆえに生き残る一行を見出すのは無意識行動(自動作用 automatism)の限界に近く、合理的なコントロールの限界から遠い所においてなのである。

この辺は彼の「個性と性格との区別」にあらわれた考え方から自然と流れ出てくるべき考え方なのであるが、筆者の特に興味をひくのはこの論文で、詩的インスピレーションは夢の形成と正確に並行すると仮定して、フロイドの「夢の形成の過程」を引用している一節である。

「まず、眠りたいという願望、外界からの自発的な退去。これに二つのことが続く、第一に、より古くより原始的な活動様式が姿を現わす可能性。すなわち逆行 regression。第二に、無意識なものを圧迫している抑圧抵抗 repression-resistance の減少。この後者の特性の結果として、夢の形成への機会があらわれるのであるが、それは夢の誘因である原動力、換言すると活動している内部、外部の刺激にとらえられる。かく發生する夢

はずである妥協的な形成物である。それは二重の機能をもつ。一方では *Hy ego*, (*ego-syntonic*) と協調 *Hyne*、取りのけなければ眠りをさまたげる刺激を除去することによって眠りたいという願望に役立つから。一方では抑圧された衝動に対して、この状況では幻覚的欲望充足という形で可能である満足をゆるす。しかし眠るエゴによって許可される夢の形成の全過程は検閲 censorship の管理、抑圧の力の残余によって動かされるコントロールの管理の下にあるのである。」

夢として現れることを許されるもの、夢として記憶されるものをフロイドは *dream-text* または顕現夢 *manifest dream* とよぶ。しかし分析者が夢の彼方にあると想像するもの、夢の原動力となる力——は潜在的な夢思想 *dream thoughts* である。

夢思想の主要素は抑圧された衝動であり、たまたまそこにある刺激と提携し、前日の残滓に自分を付加することによって、調子を下げたり姿を変えたりしながらも、ある種の表現を獲得したのでだ。

他の衝動同様この衝動も行為における満足に向って押し進むが、睡眠状態の生理的特性のため運動への放出の途がとぎされているので、やむなく知覚 perception へ

の逆方向をとり幻想的満足 *hallucinatory satisfaction* で満足しなければならぬ。潜在的夢思想はそれゆえ感覺像 *sensory images* と視覚的場面 *visual scenes* の集合に変えられる。それがこの方向を進行しているとき、ふと、われわれには新しく、途迷わせるようなことがある。

より微妙な思考関係を表現するあらゆる言語的装置 *verbal apparatus* —— 接続詞、前置詞、格変化、動詞の変化が、描写のしかた *the means of portraying* がないために、欠けてしまう。文法のない原始言語のような思考の原料だけが表出され、抽象的なものはそれが由来する具体的なものの中へ再び没入する。残されたものが一貫性を欠いているようにみえるのも当然である。意識ある思考には疎縁になってしまった象徴 *symbols* をつかって、ある種の対象やプロセスの表現が多くなされるのは、精神装置における太古性退行の結果であり、検閲の要求の結果でもあるのだ。だがずっと重要なのは夢思想が成り立つ諸要素がうける他の変化である。何らか接点をもつ要素は圧縮せられて *condensed* 新しいまとまり *unities* をつくる。思想が画像 *pictures* に翻訳されるときには、この種のハメこみ、圧縮をゆるす形態が

明らかに好まれる。丁度一つの力がはたらいて材料を圧搾するプロセスへと支配しているようだ。圧縮の結果としては顕現夢の一つの要素が夢思想の多くの要素に相応じるかも知れぬし、逆に夢思想の要素の一つが夢の中で多数の画像によってあらわされるかも知れない。

夢の形成の過程に尚二つの精練がある。

第一、アクセントのおきかえ、または移動。—— 夢思想を作りあげている各アイディアは全部等価値であるとは限らぬ。それらは附随する色々な度合の心状の色合 *affective tone* をもっていて、それに応じて重要さ、注目度の多少が判定されるのである。夢の作業 *dream-work* の中ではこれらのアイディアはその心状の状態からは切り離され、心状の状態は切り離されて扱われる。それらは何かに移されるかも知れぬし、もとの場に止るかも知れぬし、変貌をやるかも、または夢から全く消え去るかも知れぬ。心状の状態から切り離されたアイディアの重みは夢の画像の感覺的な生々しさの形となって夢の中に再現する。だがわれわれは気づくのであるが、重要な要素の上に存すべきアクセントが重要でないものの方へ移され、そのため重要な要素として夢の先端に押し出されるべき筈のものが夢思想の中では単に附随的な役割を

果すのみであつたり、逆に夢思想の中で重要であつたものが、夢の中ではただ附随的な、むしろあいまいな現れ方もするのである。

第二、夢思想にこれらの作業がなされた後で夢は殆ど出来る。がなお多少とも恒常的でない要因がある。所謂第二次の精練で、夢が知覚の対象として意識の中へ出る時に現われる。夢が知覚の中へくると知覚の内容が扱われるのとまさに同じやり方で扱われる。ギャップを埋め、連結し、重大な誤解に自分を陥し入れることも多い。いってみれば、この合理化活動は、最上のところ夢にその内容とはびつたりしないが、なめらかな正面 *frontal* *code* を与えるのだが場合によっては全く現れないこともあり、極めて微弱に作用するだけであり、そんな時には夢はその全ギャップ、辻褄の合わぬところをさらけ出すこともある。

リードは夢と詩の形成の並行の説明として彼が夢に見、汽車にゆられながら仕上げた自作の詩を分析しイメジ、メタファ、の問題にもふれるのであるが、制限されたページ数の関係で割愛しなければならぬ。

以上リードの例証多く曖昧さのない緻密な論文からあちこち勝手に切り取って彼の詩作の考え方を覗いてみた

のであるが、ローマン的、古典的、シユルレアリスム、弁証法、精神分析、また性格とか個性とか、名称はともかくとして、その内容とする考え方には納得させられる点が多い。

彼がブラッドレイ A. C. Bradley から引用している「詩人はしばしば異常な内省的思考の力をもつが、詩人の特殊な才能はそこにあるのではなく、想像にあるのだ。故に恐らく彼の最も深く独自のな解釈は想像からくるのである。そして想像の特殊なやり方は意識的に抱いているアイデアに心象の衣裳を着せることではなくて、半ば意識的に一つの物を作り出し、その作り出されたものから読者が望むならアイデアを引き出すのである」

またダンテからの引用「われは思索を夢に変せしめぬ」に異論はないであろう。まことに彼がいう通り「その最も知的な形式に於いても、詩はその詩的性格を抒情的、ローマン主義的な、詩の非理性的な源流と同列であるプロセスによって獲得するのである。」

何かのくつわをはめられて芸術が生れ出る筈がないし、「もしわれわれが自分の本能を意識して抑圧するならば強迫されて行動していることになり、知性による反

動以外には何も生み出しえなくなるだろう。」

彼の *anti-institutional*、*anarchism* への傾向にはそれだけの理由があり、「適切な形容詞を求めらるるのに自分の意識的な記憶の中にそれを探す」型の詩人として Pope や Dryden を軽視する理由もわかる。

「詩的なイメージというものはピカソの言葉を借用するなら、求められるものではなくて見出されるものなのだ。」

リードは *Form in Modern Poetry* の最後の章で「個性」「性格」の問題に戻り、詩が「性格」ではなく「個性」から生れるものだという考え方の実証としてシェイクスピアの無性格性をあげ、

「学者でもなければ道徳家でもない詩人、性格の人でもないし確信の人でもない、階級の人でも教養の人でもない、好むままに生きる裸かの感受性——直観的精神の恐るべき水晶体から発せられるみずからの声の感情こめたアクセント以上には手をのばそうとせぬ——」

またキーツの個性の受容力性、——その変動性、定着と固定性の欠除をとりあげる。そしてリルケ R. M. Rilke の、一行の詩を書くためには多くのものを見、知り、多くのものについて思いめぐらし、多くの追憶をもち、またそれらを忘れ、再びそれらがかえるのを待たな

ければならない。「それらがわれわれの中で血液に、目くばせや、身振りに、名もなくも早われわれ自身と区別できぬものとなった時——その時はじめてこの上なく稀な時間に詩の第一語がそれらのまん中に生れ、それからでてくる。」——を引用して、キーツが強調するところの受容性からの経験が詩人の血液と存在の混合肥料となりはじめて詩語に溶解されて浮び上る点をあげている。

結局詩の本質は「性格」の積極的な能力 *positive capability* ではなく「個性」の消極的な能力 *negative capability* に依存すると考えるのである。

前に述べたが、これはリードの紹介でありそれも既に新しいとはいえぬものであるが、リードの説には流行の風吹くままに、時のはずみで取り上げたり無視したりするにはあまりに本質的なものが含まれていて、それらの点をよく考えてみるといわゆる日本の写実詩、社会詩、思想詩、生活詩、抒情詩等々、極めて漠然とした名称と内容を明確にする為にも、詩作品批評の作者の思想や道徳性を評価することで終るような批評の態度にも、形式化してしまつた過去の詩の再評価にも、将来望ましい詩の傾向にも、多くの問題を提示し、示唆を与えることになるのではないかと思ふのである。